

国内事例
in Japan

1

国際環境認証を活用した観光まちづくり／ 福井・若狭湾 吉岡 久 (若狭高浜観光協会事務局長)



海水浴の安全管理を担うライフセーバー

ブルーフラッグ（以下BF）は、環境NGOのFEE（国際環境教育基金）が運営する、ビーチやマリナーの国際環境認証である。世界49カ国、4,200カ所以上に普及しており、特にヨーロッパでは優良なビーチの代名詞として広く認知されている。

福井県高浜町の若狭和田ビーチは、2016年、鎌倉市の由比ヶ浜と共に、BF認証をアジアで初めて取得した。

地域の課題と 環境認証への期待

高浜町は、福井県の西端にある人口約1万1,000人の町で、全長8kmの白い砂浜と透明度の高い海が最大の資源である。8つの海水浴場があり、最盛期には120万人以上の海水浴客が訪れ、400軒以上の民宿があった。しかし近年は衰退が続き、同時に次のような問題が顕在化してきた。

●ビーチの清掃や施設管理などを主体的に行ってきた観光事業者の経

済的な体力の低下

- 海のレジャー形態の多様化と、一部の悪質な利用客の増加
- 業者間の複雑な利害関係と短絡的な損得勘定によって、中長期的な視点に立つ新しい取組が阻害されがち
- ビーチを開いていれば観光客が来てくれるという受け身の発想で、旧態然とした観光受入体制

これに対してBFは、「持続可能な発展」をコンセプトに掲げ、「環境保護」、「管理運営」、「経済発展」といった相反しがちなベクトルを集約する仕組みを持っており、協働による問題解決を図るうえで、大きな求心力を発揮することが期待された。また、環境教育を重視していることから、海を大切にする高浜町のまちづくりの基本理念を、継続的に後押しするものでもある。

協働を実現するための 推進体制

BFの取得には「水質」「環境マネジメント」「環境教育」「安全とサービス」の4分野33項目の厳しい認証条件を満足する必要がある、関係主体の積極的な関与が必要不可欠だった。しかし、遊泳とサーフィンと水上バイクの混在は困難であり、さらに観光と漁業と周辺住民の調整も難しいなど、海の関係者の協働を実現するには高いハードルがあった。

一方で、県外の悪質な事業者が浜地を不法占拠し、水上バイクで危険違法行為を繰り返すといった状況があり、その打開に向けて関係者が集まる「ジェットスキー対策会議」が発足しており、BF認証取得を目指すに際し、それを「高浜町安心・安全な海構築会議」という、海に関すること全般を議論する場に発展させた。

同会議と並行して、地元和田ビーチの有志が中心になった「BF推進部会」も組織した。部会のメンバーは、認証条件を満足するために必要となる具体的な維持管理のための取組や広報活動を、地域の協力者を巻き込みながら進めている。

認証取得効果と 今後の展開

BFはあくまで環境認証であり、また国内での知名度が低いことから、取得後たちまち観光客が増えるといった効果はない。そこで、取得を通

じた獲得目標については長期的な視点のもと次の三つと捉えている。

協働によるビーチの維持管理

取得後、不法投棄が少なくなるなど、海水浴客のマナーが全体的に向上したという声が聞かれ、ビーチクリーンに参加す

る海水浴客の人数も増えている。住民や海水浴客の理解と参画を得ることで、持続可能な維持管理を実現することができる。

魅力的な観光受入体制の整備

認証取得によって一部制約が増えることもあり、旧来の受け身の発想しかない事業者にはBFのメリットは感じにくい面もある。しかし若い事業者や新規参入者にとってBFは格好のアイコンになっており、取得後、シーカヤックやSUP（スタンドアップパドルボード）、ビーチヨ



ガといった美しい海ならではの観光メニューが生まれ、若い住民や移住者による新しい観光ビジネスが育ちつつある。

環境教育の普及

認証条件にもある、海水浴客を対象とする環境教育プログラムについては、地元大学などを巻き込み、実施体制が構築されつつある。また、公民館が行う講座や小学校での特別授業でも、海について学び体験する機会が増えている。今後は小学校のカリキュラムに組み込む動きもある



(左) 美しい海ならではの新しい観光メニュー（ビーチヨガ）
(右)「ヒッポキャンプ（水陸両用車椅子）」の貸出も実施。

など、町内外を問わず高浜の海に対する愛情と知識を持つ次世代の育成が進んでいる。

吉岡 久（よしおか ひさし）

大阪府出身。都市／地方計画のコンサルタントを経て2009年より若狭高浜観光協会に勤務。若狭和田ビーチのブルーフラッグ認証取得に関与。

取組みの体制

